

考えの甘さの結末

M・O 運送業（二十七歳）

平成2X年7月、私はその日の配達を終え、会社に戻る途中でした。その日は、午前中に配達が終わったので、昼食を食べ、午後3時頃には会社に戻れると思いつつながら運転していました。しばらく走った時でした。それを深く気にすることもなく、運転を続けていたのです。会社に近づくにつれ眠気はどんどん強くなってきましたが、「もうすぐ会社につくから大丈夫だろう」と何の根拠もない自信があったのです。そして、その時がきました。

「ガーン！」激しい音と衝撃。そして痛みで私は気がついたのです。運転をしながら居眠りをし、対向車線をはみ出して対向車にぶつかってしまっただけです。気がついた時には、エアバックが飛び出し、眉間が切れて血が落ち、車のフロントとシートに右足が挟まれ身動きがとれない状況でした。シートベルトをしつかりとしていた為、この程度で済んだのかもしれない。足が挟まり動けなかった為、相手の方がどうなってしまったのか確認にも行けず、救急車を呼ぼうと思っても携帯電話は衝撃でどこかにいってしまいい何もできませんでした。私は「相手の方が大丈夫でいて下さい」と、

ずっと祈っていました。その夜、相手の方が亡くなったと聞かされました。そのことを聞いた時、「亡くなった」という言葉が頭の中を埋め尽くしていました。悪いのは自分なのに、「何故自分は生きているのか、自分が死ねばよかったのに」と、ずっと考えていました。足が折れ入院していた私の代わりに通夜や葬式には、両親と会社の上司の方が行ってくれました。会社全体に迷惑をかけ、両親にはとんでもない親不孝をし、本当に申し訳ないと思っています。

ありません。判決が出るまで、月命日には事故現場に花と線香をあげることができず。示談は成立しましたが、決して全てに納得したわけではないはず。刑事処分は、自動車運転過失致死傷罪で、禁錮2年4ヶ月でした。今、市原刑務所で受刑生活を送っています。受刑生活を送りながら、私の今までの行動や運転に対する考えがいかに甘かったのかに気付かされました。「これくらい大丈夫」という甘い考えの結果、何の罪もない一人の尊い命を奪ってしまったのです。そして、被害者のみならず、家族や色々な人達に迷惑をかけ、傷付け、苦しませ、人生を変えてしまいました。

も償っていきけるものではない。ありません。しかし、被害者やご遺族の為に、そして、こんな自分を支えてくれている両親や兄弟の為に、自分にできる償いをしていきたいと思えます。私のように取り返しつかない事を起こす前に、ルールを守り、他人を思いやる気持ちを持って、安全運転をしてもらいたいと思います。

「贖いの日々」

第48集（平成25年版）より抜粋

転載・二次使用を禁止します。

私の罪は一生を懸けて